ており，また養成されても海外へ頭脳流出することも多く，資格の国際的な調整や送り出し・受け入れに係る二国間協定の必要性が指摘された．高齢化が進んでいるとはいえ，経済水準の格差，貧困問題は，国内でも国際的にも，変わらず存在しており，国際的な協調が必要であることも強調された．

会議翌日は，ホーチミンから80kmほど南下したところにあるベンチェ省の社会保障センターや高齢者地域組織を訪問した．社会保障センターは貧困で身寄りのない高齢者や寝たきり高齢者が居住する公的施設で，人口140万人のベンチェ省唯一であるこのセンターの入居高齢者は52名ではあるが，このような施設が全国の各省に，合計400箇所程度あるという．高齢者地域組織として，人口高齢化に関する国際NGOのヘルプ・エイジ・インターナショナルが支援している「世代間相互扶助クラブ」を訪問したが，健康づくりやボランティアによる訪問介護，所得創出マイクロファイナンスなどを行っているとのことであった．アジアでこそ，アクティブ・エイジングが必要とされ，またそのための地域力は高いのではないかと考えさせられた．また，ホーチミンからベンチェ省へはメコン川を渡って行ったが，その橋は2009年に建設されたもので，それ以前は船で行き来していたとのことである．インフラの整備に応じて急速に社会が発展する只中で，高齢化も進展しているわけである．

（林　玲子　記）

日中韓印数理生物学コロキウム

平成29年８月23日～８月26日にインド数理生物学会が主催し，Indian Institute of Technology（IIT）のカンプール校で開催された日中韓印数理生物学コロキウム（CIJK2017）は日本，中国，韓国，インドの４カ国の数理生物学会が初めて合同で行う国際大会である．もともとこの国際会議は日中韓数理生物学コロキウムとして２年毎に開催されてきた数理生物学の会議にインド数理生物学会が加わったものである．今回の初参加国であるインド側の雰囲気は，全体的には生物や社会科学に関する数理科学研究というよりは物理数学などをも含む応用数学全般といった印象であった．これは日本数理生物学会が400人程の数理生物学者（数理人口学者を含む）を抱えているのとは対照的に，インドにおける数理生物学研究がまだ発展途上である事を露呈している．しかし，今回目立ったのはインド側の参加者の多くが若い大学院生であったことで，この国の数理生物学に関する将来の伸び代は非常に大きいと痛感した．

本コロキウムにおいて，著者は宮崎大学の今准教授が主催するミニシンポジウム“Dynamical Systems with application in Biology”にて“Structured population models for two fold stochasticity: heterogeneity and variable environment”というタイトルで，個体差と環境変動二つの性質を持つ構造人口モデルに関する解析結果を招待者として報告した．確率論を用いたこの手の研究はインドの数理生物学会では少なかったが，質問や議論がとても積極的であったのが印象的であった．

最後に，このような素晴らしいコロキウムに参加させていただける機会を与えてくださった今准教授，コロキウムを主催してくださったProf. B. V. Rathish Kumar，Prof. S. Ghorai，およびコロキウム事務局関係者に感謝したい．

（大泉　嶺　記）

第27回日本家族社会学会大会

2017年９月９日，10日の２日間，京都大学吉田キャンパスにおいて第27回日本家族社会学会大会が